

【一般部門】第5回京都文学賞 寸評（二次選考を担当した読者選考委員からの選評の抜粋）

目次（タイトル五十音順）	頁
「異伝 平家物語『舞へ舞へ蝸牛』」	1
おうこくさんと、三条室町のぼく	1
鬼の名は	1
京都市西入ル West 凶区	1
京を舞台に、ナツ子は踊る	1
古希なんだもの	1
古都思い出芋男	2
すべて京の手のひらの上	2
電気仕掛けの京都迷宮	2
鳴かぬ蛩は身を焦がす	2
中関白家の隆家 刀伊を撃退した公卿	2
難聴のエスパー	2
春、雨を帯びたり	3
火縄の夢	3
プールじゃなくて	3
魔界山城國	3
まれびとジュワンは河原に歌う	3
めぐる塔をめぐる	3
メタモルフォーゼの惑星	4
「余白」―絵師呉春のまなざし	4
嵐電の女子・叡電の男子	4
1LDK	4
Absolute Wonderland	4

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
「異伝 平家物語 『舞へ舞へ蝸牛』」	<ul style="list-style-type: none"> ○登場人物は歴史上の人物を忠実に盛り込み、リアリティがあって面白い。歴史を違う角度から見たような気にさせられる素敵な作品だと思った。 ○京都の代名詞でもある平安時代を舞台にした、豪華絵巻のような描写に感心させられた。今宮神社や随心院を思い起こさせる演出は見事だった。 ○要所要所でその場面に即した今様が歌われており、物語に厚みを持たせていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○史実を並べている箇所が多く、登場人物も多いので理解しづらかった。 ○ナレーションと会話体で内容が重複しているところがあり、リズムが悪くなっているように感じた。 ○読めない字がところどころにあり、漢字から想像して読んだ。一般的に読めそうにない字はルビを振った方が良いと思った。
おうこくさんと 三条室町のぼく	<ul style="list-style-type: none"> ○小学生の目線で描くシンプルで感情移入しやすいストーリーに好感を持った。 ○木島櫻谷という、京都に実在した画家と主人公である現代の小学生の話が無理なくつながっていて、途中で友情物語に変わるあたりがよくまとまっていた。 ○書き慣れていると感じた。自然な文章表現と流れで、違和感なく物語に入り込めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○もっと複雑な展開があれば読みごたえも出てくるが、少し単純すぎると思った。 ○小学生の主人公の語りだが、子供らしくない言葉遣いが多い。作者が子供の代弁者の設定の方が自然だと思う。 ○もう少し登場人物の特徴や、この主人公独特の性格を目立たせてほしい。
鬼の名は	<ul style="list-style-type: none"> ○一つ一つの過去を様々な視点から書き込んでいるため、後半になるにつれて、物語の輪郭がくっきりとしていた。 ○人間と鬼の二項対立ではなく、魔族を設定し、話を複雑にしているところが良かった。また、善悪で語られていない点も良い。 ○一文が短くて読みやすい。会話の入り方が自然で小気味よく、次々読ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ボリュームがあり、複雑なストーリーで登場人物も多く、途中から語り手が変わるなど、ついていくのが大変なところもあった。 ○リアリティが希薄で、今なぜそれが起こるのか、その必然性を感じられない。たとえファンタジーでも、その中での必然性を説明してほしい。 ○後半、回想や説明が多く、あまり話に集中することができなかった。
West区 京都市西入ル	<ul style="list-style-type: none"> ○作中の人物が、作品内で京都文学賞に応募する小説を書く、というメタフィクションの構造が凝っている。 ○ブラックユーモアや筆力に圧倒された。物語のテンション、発想が面白い。 ○現実と非現実とをシームレスにつなぐような文章が見事。日常の中に幽霊を自然に登場させ、読者を納得させてしまう力がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「凶区」というタイトルにひねりを効かせているのはよく分かるが、まがまがしいイメージが先行し、読者層を狭めてしまうのではと思った。 ○幽霊、ゾンビ、パラレルワールド、SFが入り乱れており、統一感がなかった。 ○英語、韓国語、ポルトガル語が出てきたが、必要性を感じなかった。
京を舞台に、 ナツ子は踊る	<ul style="list-style-type: none"> ○京都というテーマが物語の中に自然に溶け込んでいて、違和感がなかった。 ○結末を語りすぎないことで読者に想像の余地が生まれ、今後良いことがありそうな明るい幕切れだったのが良かった。 ○主要なキャラクターがコンパクトに紹介されており、混乱なく物語に没入することができた。人物造形が良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○急に終わった感じがして物足りなかった。 ○会話以外の文では説明が多く、読み手が想像して楽しむ余白が少ないように感じた。自然ではなくて先回りされている感じがする。 ○読みやすいが全体的にさらりとしていて、深みに欠ける。エンディングにいくまでに、もう少しひねりが欲しい。
古希なんだもの	<ul style="list-style-type: none"> ○高校を舞台とした小説は、生徒のバックボーンが似ているため、多様な人物を描きにくい。京都の小学区制の高校が舞台となっていることで、それを免れている。京都を舞台にする必然性もあった。 ○人物ごとに章立てられていて読みやすく、各人物のキャラクターが分かりやすかった。 ○各人物の内省的な描写が深く、説得力がある。人生経験を重ねた人でなければ出てこない言葉の重みがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○17歳と69歳とを行きつ戻りつ描くことで場面の変化はあるが、全体のストーリーがやや平坦になってしまっている。 ○もう少し高校時代のエピソードを入れた方が、登場人物に感情移入しやすいと思う。 ○主人公を設定し、その人物を軸に物語を進めていけば、スピード感のある作品になるのではと思った。

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
古都思ひ出芋男	<ul style="list-style-type: none"> ○タイトルから作者のアイディアが光っていた。回文に着目したのが面白い。 ○余命ものにありがちな、感傷やお涙頂戴、懐古趣味を排除している。淡々と乾いたユーモアのある文章が清潔だった。 ○語彙や言葉の表現に温かみがあって良かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○序の部分が少々長く感じる。言いたいことはもっと絞った方が良いと思う。 ○主人公の一人語りは面白いが、時折、読み手が置いていかれる感覚があった。 ○無理矢理回文にした感じを受けた。
すべて京の手の上	<ul style="list-style-type: none"> ○京都の地理を自然にストーリーに組み込むことのできる設定。その発想力が良い。 ○視点がかわることによって、「そこにつながるのか」という別視点からの新鮮な驚きが得られた。 ○登場人物名が京の地名なのが単純で楽しめた。現実の深刻な話ではないという印象を持たせるのに成功している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○リアリティが希薄すぎて、どうしてもよい話のオムニバスという感じがした。 ○設定に少し無茶が多い。あり得ないと思うだけでなく、登場人物の行動に納得がいかない。 ○一つ一つの事象をもっと掘り下げて書いてほしかった。作り込みが甘く、全体的に説得力が欠けていると感じた。
電気仕掛けの京都迷宮	<ul style="list-style-type: none"> ○物語のアイディアや設定に好奇心が刺激され、興味深く読めた。 ○単純に敵・味方を区分するのではなく、人物関係を複雑につないでいることで、物語に奥行きが出ていた。 ○文体がシンプルで親しみやすく、時折入り込む季節や風景の叙情的な描写に美しさを感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○SF的な要素と現実の線引きがあいまいで、少し混乱してしまった。 ○会話が物語を進行させる意図に使われているためか、想定内の言葉が多いと思った。 ○電子工学の専門用語が多すぎて、広く一般読者に開かれていないと感じた。
鳴かぬ蛩は身を焦がす	<ul style="list-style-type: none"> ○一つ一つの事象に対して主人公が抱く感情や価値観が丁寧に書き込まれているので、実在する人物のように思えるリアルさがあった。 ○感情の細やかな移ろいがよく描かれて滑らかな文体。そして繊細な言葉選び、美しい描写、表現が良い。 ○五感に訴えかける描写が、地の文を豊かにしていたと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○京都の名所を散りばめただけで、作品自身が観光ガイドのようになっていた。 ○キャラクターへの感情移入がしづらかった。口数が少ない分、表情を文章化するなど工夫すると、伝わりやすいかもしれない。 ○伝わりにくい比喻表現が散見された。ほどほどに比喻を使う方が効果的かもしれない。
刀伊を撃退した公卿 中関白家の隆家	<ul style="list-style-type: none"> ○藤原隆家が生きていた時代に起こった出来事や登場する人物等がよく調べられていて、史実とファンタジーを上手く融合させて丁寧に仕上げられていた。 ○ストーリーの起伏、物語の盛り上がりがとても分かりやすく、感情移入できた。 ○端正で格調高い文章が、この歴史小説によく合っている。独りよがりな表現がないのも良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○タイトルで作品の内容が全て説明されている感じがするので、どんな作品なのかと思えるように、もう一工夫あれば良かった。 ○登場人物が多数で途中で覚えられなくなった。本筋にあまり関わらない人物は省いても良かったのではと思った。 ○説明書きが多く、もう少しセリフを増やした方が、情景が浮かびやすいと感じた。
難聴のエスパー	<ul style="list-style-type: none"> ○難聴者の学生生活や、京都における難聴者への支援の歴史が徹底して取材されていた。 ○丁寧に一つ一つのエピソードを描いている。とても書き慣れた人の文章という印象で、安心感と好感を持って読むことができた。 ○難聴者を主人公にした点に工夫が見られる。描き方も自然で心情描写もリアルだった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○序盤がダイジェストのように急ぎ足になってしまった印象がある。 ○もう一歩踏み込んで読み手の胸を締め付けるようなシーンやエピソードが欲しかった ○友情・恋愛・家族愛が同じウエイトで書かれているため、どれか一つに重点を置いた方が、読み応えがあったのではないと思った。

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
春、雨を帯びたり	<ul style="list-style-type: none"> ○史実をもとに、アイディアを膨らませたことが分かる。また、史実と創作の境が分からないように自然に書けていて素晴らしいと思った。 ○章を追うごとに登場人物が増えていくが、登場のさせ方が絶妙で、混乱することがなかった。 ○流れるような自然な叙述で読みやすい。「読む」という意識もなく読むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○各人物の登場時の人物描写が乏しく、どのような人物なのか把握するのが難しかった。 ○地の文も会話文も、作品の大部分が説明になっているため、主人公にも感情移入することができなかった。 ○伏線かと読み手が思う箇所を増やせると、一気に良い作品になると思った。書き込みが不足している。
火縄の夢	<ul style="list-style-type: none"> ○タイトルは後で振り返ると内容にピッタリである。想像の余地を持ったタイトルで良い。 ○様々な文献を参考にし、その土地に根付いた伝説を繋いだストーリーは京都という街の良さを引き出すには絶好のアイテムで、そこに力を入れたこの作品はとても味があると思った。 ○時代の特徴や男女の繋がりなど、様々なところに工夫が見られ、ストーリーに奥深さを感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○登場人物の特徴が、いかにも時代小説に出てきそうな紋切り型の感じがした。 ○伊根町の雰囲気をもっと少しストーリーの中に効果的に盛り込むことができたなら、もっと興味が沸いたと思った。 ○歴史書、教科書的な記述に終始してしまっているように感じられた。
プルじゃなくて	<ul style="list-style-type: none"> ○鴨川の流れるような流れるストーリーは、美しい情景を想像させ、心が洗われるような感覚になった。儚さや寂しさの表現にも繋がっていて素晴らしい作品となっている。 ○言葉の選択が面白く、引っ掛かりを感じさせるような意図的な構築がされていた。何度も読みたいと感じさせる難解さがあり、優れていると感じた。 ○文体や描写に独特の感性を感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○読後もこのタイトルが理解できなかった。解説がなければ意図が分からない。 ○もっと改行や段落分けをしてほしい。意識的に連なる書き方をしているのかもしれないが、少し読みにくかった。 ○読後に空しさや喪失感があり、ここで物語が終わってしまうのは少し残念な気がした。
魔界山城國	<ul style="list-style-type: none"> ○「死神」と呼ばれるようになった過去に納得感があり、そこから生まれる葛藤に焦点が当てられる流れが自然だった。 ○場面転換時のふとした描写が巧みだった。読み手に必要な最低限の情報をコンパクトにまとめ、尚且つ情景描写も適量で、スムーズに頭に入ってきた。 ○化け物の姿、変身の様子、戦いなど、まるで映画を見ているようなスピードで色彩まで想像できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○映像を説明しているような描写が続き、単調だと感じた。引き込まれるようなストーリー展開が必要ではないかと思う。 ○登場人物に愛着が湧きにくい。個性が見えるような描き分けが必要だと思った。 ○段落分けもなく何十行も地の文が続く箇所が多々あり、非常に文章が読みづらい。
まればとシユワンは河原に歌う	<ul style="list-style-type: none"> ○キリスト教、隠れキリシタンをテーマに据えた所が良かった。作品に奥行きを与えているように感じた。 ○主人公の気持ちや考えたことがそのまま短い文で書かれていることで、若さや未熟さ、瑞々しさを感じた。 ○単に京都だけではなく長崎との関係の中で京都を描いたことで、京都が持つ魅力の幅広さを描くことに成功している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○長い歴史の京都で生き抜いてきた人物に、もっと命を吹き込んでほしかった。もう少し登場人物を工夫してほしい。 ○台詞が説明的で、物語を進めるために会話で動かししている感じがした。 ○デリケートな宗教という分野に挑んだ迫力のある作品ではあるが、読者を惹きつけるものが弱いと感じた。
めぐる塔をめぐる	<ul style="list-style-type: none"> ○視点の転換が全体の答え合わせのように仕組みられているのが良かった。 ○ストーリーの交差のさせ方が素晴らしく、ここでこう来るのか、あの描写がここで生きてくるのかと、驚きながら読み進めた。 ○比喩表現が繰り返されるが、それが面倒くさく、多感で、複雑な登場人物の性格と心情を表している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ところどころの設定や関係性がリアリティを持って伝わってこない。もう少し読み手も物語に入り込めるように、工夫して書いてほしいと思った。 ○文体、手書き、暗転など、様々な構成がやや気になり、分かりにくく落ち着きがない印象を受けた。 ○情景を描く小道具や説明、カタカナの名前など、とっつきにくさがあった。

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
メタモルフォーゼの惑星	<ul style="list-style-type: none"> ○エレベーターの油圧式という着眼点が面白く、それが京都とつながる点も良かった。 ○短文で切って読ませる方法は成功していると感じた。淡々としたリズムがあり、読みながら小説の世界を泳いだ感じがした。 ○自分が知らないうちに、他人に取返しのつかないことをしていたという衝撃や葛藤が伝わる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ストーリーを通して描くべきことが全て主人公の心情として表現されており、深みがなかった。 ○主人公の性格や行動の変化の過程に納得しづらく、違和感があった。 ○様々な町や土地名が出てくることで、京都感が薄まってしまったように感じた。
「余白」―絵師呉春のまなざし	<ul style="list-style-type: none"> ○絵師の人生の最後、小説の最後で「余白」というタイトルの意味が明かされる。読後に深い余韻が残って良かった。 ○主人公の絵師が魅力的に描かれており、その周辺の人々も実に個性的で良かった。 ○多くの美術・芸術関連の書物を参考にしているだけあり、描写が素晴らしく、登場人物も忠実でリアリティがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○史実に忠実であればあるほど、リアリティに乏しくなり、面白みがなくなっている。 ○主人公に感情移入できるような構成や書き振りになっておらず、最後まで無理矢理読まされている感じが拭えなかった。 ○起承転結の「転」を膨らませて強調することができれば、もっと良い作品になると思った。
嵐電の女子・叡電の男子	<ul style="list-style-type: none"> ○展開に無理が無く、構成が明確で映像が浮かぶような描写が続き、分かりやすかった。 ○出会いの偶然はあるかもしれないと思えるほどリアリティがあり、そこからすぐに恋に発展しない、簡単に付き合わない点もご都合主義でなく、読後感が良かった。 ○会話体の書き方が特に良かった。テンポも良く、読みやすかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○一つ一つのエピソードは面白いが、全体で見ると盛り込みすぎだと思った。面白くても印象が薄くなり、もったいない感じがする。 ○せっかくタイトルが工夫されているのに、嵐電と叡電の特徴をストーリーに影響させていないところが少し残念だった。 ○登場人物の心の声が地の文に多すぎると思った。
1LDK	<ul style="list-style-type: none"> ○どこか客観的であり、無表情な文章が、心に波風が立たない主人公を表現している。 ○文章が短めでそれがリズムを生み出していた。簡潔で読みやすかった。 ○どこにでもありそうな日常が描かれているが、時折、祇園祭など京都のオリジナリティが出ていて、このバランスが京都人のリアルだと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○装飾の無い事実の羅列で、スピードに変化が無いように感じた。 ○書き込みが少ないせいか、内容の深みや重みに欠けるように思えた。 ○情景を説明するような箇所があり、読者はそれに沿わされて視線と思考を進めていかないといけないため、かえって想像の余地がない感じがした。
Absolute Word-reverse	<ul style="list-style-type: none"> ○月ごとに分けている構成が良かった。 ○曲やラジオが場面転換しない喫茶店内での変化を出していた。細かい情景表現も舞台演出のような味があった。 ○文章を言い切らず止めて終了させている部分が多く、リズムを作るうえで効果的だと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○タイトルと内容が乖離しており、タイトルからは内容が想像しにくい。 ○全体的に単調で、起承転結が感じられなかった。 ○文書の流れで分かる動作をわざわざ書く必要があるのかと思った。そのせいで話の流れが悪くなっている。